

南丹教育局 NEWS

平成 27 年 7 月 7 日 発行 第 128 号

平成 27 年度京都府 PTA 指導者研修会南丹大会 (京都丹波いじめ・非行防止フォーラム)を開催しました！

平成 27 年 6 月 28 日(日)京都学園大学 光風館にて管内の PTA 会員、学校教育・社会教育関係者、青少年育成に関わる方、子育てに関心のある方等 約 250 名の参加がありました。

オープニング

「鶴ヶ岡ふるさと合唱団」のみなさん



鶴ヶ岡で活動されているフォークソンググループ「あぜみち」を中心に、年代を超えて親しく交流を深め、元気になろうと結成された「鶴ヶ岡ふるさと合唱団」に「手のひらを太陽に」とオリジナル曲「風」「ふるさと美山」を披露していただき、会場が温かい雰囲気になりました。

全体会：講演

演題「気づいていますか？子どものサイン」

講師 京都府家庭支援総合センター 相談・判定課

心理判定員 松友 辰己 氏

心理判定員という立場で出会う様々な事例をもとに、親として気持ちに余裕を持つことの大切さや、家庭での何気ないやりとりの中に気持ちを掴むヒントがあること等、丁寧に教えていただきました。

また、東日本大震災の被災地、福島県南相馬市での支援活動時に体験されたことについてもお話をしてくださいました。

【参加者の感想】

- ・子どもによって違う理解の仕方について、おとなが余裕を持って接することが大切。子どもが抱えるストレスについて、ベースを合わせ寄り添っていくことができるようになっていきたい。
- ・子どもからのサインに気付くのが遅れないように見ていきたいです。「相手との呼吸を合わせる事も必要」とお話を聞いて、自分には出来てない部分かも・・・と思い、今日から実行したいと思います。
- ・子どものサインを聞き逃していると思いました。おとなの接し方により子どもはいかようにもなる・・・本当にその通りです。このままではいけないと思うので、考えていきたいと思いました。
- ・同じ事を伝えるのに、伝え方で伝わり方、理解の仕方が人それぞれ違う。子どもは特に独特な発想をするので、言葉のかけ方で子どもの良いところを引き出し、話をしっかり聞いてあげることで、表面上の言葉でなく心の声を聞いてあげられるようにしたい。

分科会A： 実践発表

「自立したPTA活動」

亀岡中学校 PTA 前会長 西脇 隆雄 氏

「参画と協働による『地域響育学校』」

— 子どもの学びを支える学校運営協議会・GTA(祖父母によるPTA組織)の取組 —
丹波ひかり小学校 教頭 前谷 浩之 氏



亀岡中学校のPTAは、花いっぱい運動や心持ち運動等様々な活動を主体的に展開したり、「亀中フェスティバル」ではPTAのOBで組織されている後援会と協力したりして、学校だけでなく、地域との連携も大切にしながら活動されています。その多彩で積極的な取組の様子を紹介していただきました。

丹波ひかり小学校の学校運営協議会は、学校と家庭、地域が連携を深めて、学習支援や食育、栽培環境等様々な角度から学校を支援し、子どもたちの豊かな学びと育ちの創造を目指して活動されています。そのニーズに合った組織的な取組の様子について、お話をいただきました。

【参加者の感想】

- ・子どものために、チームワークよく活動されていることが、よくわかりました。多くの方々の支援により教育が進んでいることもわかりました。
- ・活動を通じて、人とのつながりを大切にされ、さらに、子どもたちのためになる活動をしていることがわかりました。
- ・出来る人ができる事を、それで良いと共感できました。地域の方に協力していただける学校は素晴らしい。
- ・子どもの学びを支える地域の皆様の様子がよくわかりました。今後の学校の姿だと思いました。
- ・たくさんの人を巻き込んで子どもたちを見守っている関係が、今、必要なことだと思いました。

分科会B：講演

「あなたの子どもは大丈夫？」

— 子どもたちを取り巻くサイバー犯罪の現状と対策 —

南丹警察署 生活安全課 生活安全係長 洞庭 修平 氏

今、社会的に問題になっているインターネット上でのいじめや犯罪から子どもたちを守るために、保護者や周囲のおとながどうすればよいのかを、専門的な立場から事例も交えながらお話をいただきました。

【参加者の感想】

- ・ネットの世界、わかっているようで、わかっていなかったと思いました。子どもたちにも今日の講演の話をして、話し合いたいと思います。
- ・インターネットの恐ろしさ、本当にゾッとしました。高校生の子どもがいるので、帰って話をしてみようと思います。
- ・正しい知識、ルールを守って利用することの大切さを伝えていかなければならない。それがおとなの役割だと思います。
- ・きちんと指導することが絶対に必要であると痛感しました。